

藥師寺

旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報

2013

薬師寺



食堂南面の基壇外装と階段、石敷、雨落溝（東から）



食堂南面の東階段（南西から）



食堂基壇中央部の版築層（北から）

序

薬師寺は天武天皇の発願により白鳳時代に建立され、和銅3年（710）の平城遷都に伴い養老2年（718）に現在地に移されました。

平安時代以降は火災や震災、兵火等による堂塔の焼失と復興を繰り返し、廃仏毀釈や農地解放で寺地は狭小化し、戦後には主要伽藍を構成する建造物は、東塔と東院堂の他、旧金堂などの数棟が建つのみとなっていました。

このような状況の中、薬師寺は昭和40年代以降、お写経勧進による伽藍の復興をすすめ、昭和51年に金堂、北西僧房を復興し、以来北東僧房、西塔、中門、回廊、大講堂と復興しています。

今回の食堂発掘調査では、基壇外装の一部である地覆石や階段の下部、さらに基壇周辺で石組の雨落溝と石敷が検出され、薬師寺食堂は、桁行11間、梁行4間の礎石建物で、基壇は東西が47.1m、南北が21.6mの規模であることがわかりました。

近い将来、史跡薬師寺旧境内保存整備基本計画並びに発掘調査に基づき、白鳳伽藍の復興の夢に向けて食堂の再建を進めたいと願っております。

平成25年3月

法相宗大本山 薬師寺

管主 山田法胤

目 次

序

目 次

1 調査経過	3
2 食堂の歴史と既往の成果	4
(1) 薬師寺の創建と食堂の歴史	4
(2) 既往の調査	5
3 検出遺構	6
(1) 調査前の地形と基本層序	6
(2) 食堂に関わる遺構	9
(3) 食堂造営前の遺構	15
(4) 食堂廃絶後の遺構	16
4 出土遺物	17
(1) 瓦 磚 瓢	17
(2) 土器・土製品	21
(3) 金属製品・石製品・錢貨	22
6 結 論	23
(1) 薬師寺食堂の建築	23
(2) 食堂の造営と廃絶	25
報告書抄録	26

例 言

1. 本書は薬師寺旧境内保存整備事業にともなう平成24年度の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は法相宗大本山薬師寺の委託を受けた独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部（平城地区）が、平成24年9月24日から平成25年3月22日にかけて実施した。
3. 調査は、箱崎和久・馬場 英・芝 康次郎・石田由紀子・荒田敬介が担当し、早川和賀子（九州大学大学院）、加藤 瑛が参加した。また、石材の鑑定は脇谷草一郎・田村朋美があたった。
4. 調査にあたっては、文化庁、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の協力を得た。
5. 本調査は、都城発掘調査部（平城地区）の平城第500次調査として実施したもので、各遺構には平城京左京における調査基準にしたがい一巡の番号を付した。発掘遺構図の座標値は、世界測地系（平面直角座標系第VI系）による。
6. 本書の作成は、副所長・深澤芳樹の指導のもと調査員全員であたり、全体の討議を経ておこなった。編集は石田山紀子が担当した。各項目の執筆は以下のとおりである。
1～3・6 (2): 石田山紀子、4 (1): 川畠 純、4 (2): 芝 康次郎、4 (3): 神野 恵、
6 (2): 箱崎和久
7. 遺構・遺物の写真は、中村一郎・栗山雅夫・杉木和樹・鎌倉 純が撮影した。
8. 表紙題字は薬師寺山田法胤管主の手によるものである。

1 調査経過

法相宗大本山薬師寺では、2011年から始まった薬師寺旧境内保存整備計画にもとづいて、食堂再建事業をすすめている。今回の調査はその一環で、基壇や建物の正確な規模や位置、基壇外装の様相など、食堂の全容を解明すべく食堂全体を登録調査対象とした。

食堂は、薬師寺と近畿大学が中心となり結成された薬師寺伽藍発掘調査団や奈良文化財研究所によって1969～1974年の4回にわたって、部分的な発掘調査がおこなわれ、基壇外装や雨落溝、石敷等が確認されている。本調査ではこれらの成果をふまえ、食堂の遺構を全面的に確認できるように調査区の設定をおこなった。調査区は、東西50m、南北27mで、調査面積は1350m²である。過去の調査区と一部重複する箇所があるため、新規発掘部分は約950m²となる。なお、土置場の関係から東と西に分けて調査をおこなった。

調査に際し、事前に食堂跡に植えられていた樹木の伐採・伐根をおこなった。なお、食堂の周囲には防災用の管や電気・水道等の配管、あるいは現代の暗渠が埋設されていたため、調査区の縁辺部では一部遺構面まで掘削できなかった部分がある。

今回の調査では、食堂の建物および基壇の規模がほぼ確定し、基壇築成の工程や基壇外装の様相、造営や廃施設に関する年代的指標など、食堂に関するさまざまな知見を得ることができた。また、食堂造営以前の薬師寺に関わる構造も確認した。

第1表 調査經過

9月20日 漢壺区設定。
9月24日 飛行開始。調査区東道より重機搬出。
10月5日 食堂SX3050東北側の塗装変更を検出。
10月29日 中央階段SX3040を再提出。
11月2日 基礎面での塗装変更を検出。
11月9日 基礎面で東階段SX3041を検出。
11月22日 ヘリコプターによる航空写真撮影。
11月29日 ハイライダーによる全景写真撮影。
11月30日 平面図作成。
12月3日 大土塁KS3053の掘り下げ開始。大量の瓦礫出土。
12月13日 東北壁の新削開始。
12月26日 東北壁の掘め戻しと同時に西側の掘削開始。
1月10日 部門による現場検討会。
1月16日 基礎面の塗装剥落SX3037および石数SX3057検出。
1月23日 基礎面の西階段SX3042検出。
1月24日 記者発表。
1月26日 規制説明会。見学者714名。
2月7日 ヘリコプターによる航空写真撮影。
2月8日 平面図作成。
2月14日 ハイライダーによる全景写真撮影。
2月19日 地覆石・石歯、雨落溝の石材鑑定。
2月20日 断削開始。
2月26日 石歯KS3036を検出。
3月4日 断削鉄筋と並行し、埋め戻し開始。
3月13日 石歯KS3035の地中レーダー探査。
3月22日 埋め戻し完了。



第1圖 發掘調查位置圖 (1:3000)

2 食堂の歴史と既往の成果

(1) 薬師寺の創建と食堂の歴史

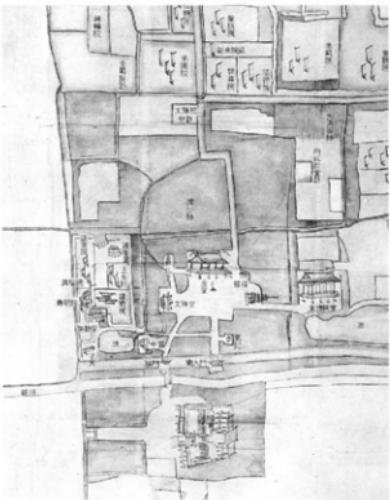
薬師寺 薬師寺は『日本書紀』によると、天武天皇9年(680)に天皇が皇后(のちの持統天皇)の病気平癒を祈願して発願した寺院とされる。これが藤原京の薬師寺であり、現在は本薬師寺と呼ばれ、権原市城殿町に東西両塔および金堂の土壇を残す。その後、和銅3年(710)の平城遷都とともに薬師寺も平城京右京六条二坊に寺地を移し、以来現代まで法灯が受け継がれている。平城京の薬師寺造営に関しては、長和4年(1015)に撰述され、元弘3年(1333)に書写された薬師寺本『薬師寺縁起』(以下『縁起』と略す)に、養老2年(718)に伽藍を移すとの記載がある。しかし1977年の発掘調査で、東僧房北側の井戸より靈龜2年(716)の年紀のある木簡が本薬師寺式の瓦や奈良時代初頭の土器などとともに出土したことから(『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所1987、以下『薬師寺報告』)造営自体はそれより以前には始まっていたらしい。堂塔の建立に関しては、東塔のみ記録があり、天平2年(730)に建立されたことが『七大寺年表』や『扶桑略記』などにみえる。

食堂 古代における食堂は、僧侶が一同に会して斎食をする建物である。食堂の実態は史料が乏しく、不明な点が多いが、そのほかにも、布薩に代表される仏教儀礼や、年中行事などがおこなわれ、僧侶の日常的活動を支えると同時に儀礼空間でもあったという(吉川真司2010「古代の食堂」『律令国家史論集』培文房)。薬師寺食堂の造営年代に関しては不明だが、東塔の年代を手がかりにすると、おそらくとも奈良時代前半には建てられたとみられる。

『縁起』には、「一、食堂一字九間四面、東屋、長十四丈、広五丈四尺五寸、柱高二丈五寸、前九間、後戸三間、左右脇門。」とある。この記述によると、食堂の規模は桁行11間、梁行4間で、寄棟造、

建物の大きさは桁行140尺、梁行54尺5寸とある。また、扉口は正面に9つ、背面に3つ、左右には脇門が1つずつあったと記されている。ただし、屋根の形や柱の高さに関する記述は、薬師寺本にのみみられ、建永2年(1207)の醍醐寺本『諸寺縁起集』や康永4年(1345)の護国寺本『諸寺縁起集』に収録された『薬師寺縁起』にはみられない。

この食堂は、天禄4年(973)に北方に隣接する十字廊より出火した火災により焼失した(『縁起』・『扶桑略記』)。この火災は、平城京の薬師寺にとって創建以来初めてとなる大規模な灾害で、金堂と東西両塔以外の主要な伽藍のほとんどが焼失している。その後、食堂は寛弘2年(1005)に再建されたことが『縁起』にみえる。また、保延6年(1140)に大江親通によって編まれた『七大寺巡礼私記』によれば、「食堂一字九間四面瓦葺」とあり、『縁



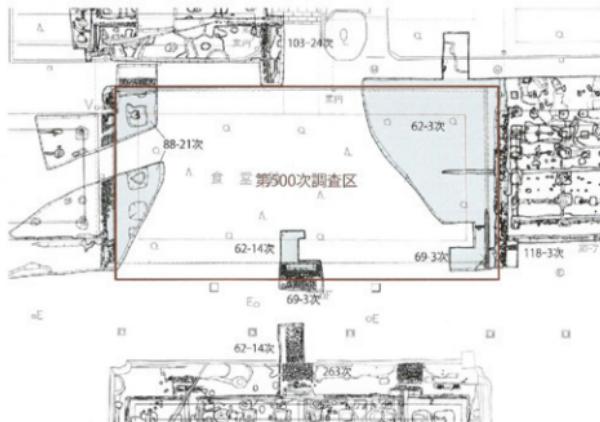
第2図 『伽藍寺中并阿弥陀山之図』(部分)

起」と同じ桁行11間、梁行4間の瓦葺建物だったことわかる。以後は食堂に関する文献史料はみあらず、いつまで存続したかは不明だが、延宝2～4年（1674～1676）の作とされる『伽藍寺中并阿弥陀山之図』や元禄2年（1689）の伽藍絵図など、江戸時代の絵図には食堂が描かれていません。代わりに食堂の位置には、南北の参道が設けられている。したがって、遅くともこの頃までは廃絶していたと考えられる。なお、この南北の参道は、1969～1974年の発掘調査まで参道や生活用通路として踏襲されてきた。今回の調査でも、参道があった基壇中央部は基壇土の残存状況がよく、路面と考えられる固く締まった面も土層で観察できた。長年通路として利用してきたため、後世の耕作などにともなう削平を免れたと考えられる。

（2）既往の調査

食堂は、1968年から実施された薬師寺伽藍復興計画にともない、1969年（第62-3次）、1970年（第62-14、69-3次）、1974年（第88-21次）の4回にわたり部分的な発掘調査がおこなわれている（〔薬師寺報告〕）。これらの調査のなかで、第62-3次、62-14次、69-3次調査は薬師寺伽藍発掘調査団の手によるもので、それ以後は奈良国立文化財研究所（2001年の独立行政法人化により奈良文化財研究所）によるものである。

遺構は、第62-3次調査で基壇東南隅の地覆石の一部を発見したのを皮切りに、翌年の第62-14次調査では南面の中央階段部分と講堂に向けて南に延びる石敷の参道が検出された。また、基壇北面西寄りの地覆石、および石敷や石組雨落溝の一部が検出され、部分的ではあるが基壇とその周辺の状況が明らかになった。第88-21次調査では、食堂西側柱列の礎石下地業と礎石抜取穴を検出し、一部では礎石根固め石も残存すると報告された。これらの調査成果から、食堂は桁行11間、梁行4間の礎石建物で、桁行総長は140尺、柱間寸法は中央間のみ十字廊の柱間に合わせて15尺、その他は12.5尺等間、梁行は総長54尺で身舎2間は14.5尺、廊12.5尺と復元され、「縁起」に記載された食堂の規模にはほぼ一致するとされた。また平安時代の瓦が少量ながらも出土することから寛弘2年（1005）に再建された可能性が高いとされているが、再建を示す明確な遺構は確認されていない。



第3図 今回の調査区および既往の調査位置図（1：500）

3 検出遺構

(1) 調査前の地形と基本層序

調査開始前の状況 調査開始前における調査区の様相は、1979年までの発掘調査成果にもとづく整備で、食堂の基壇位置に凝灰岩製の縁石を置き、その内部に盛土をし、多数の樹木が植えられていた。

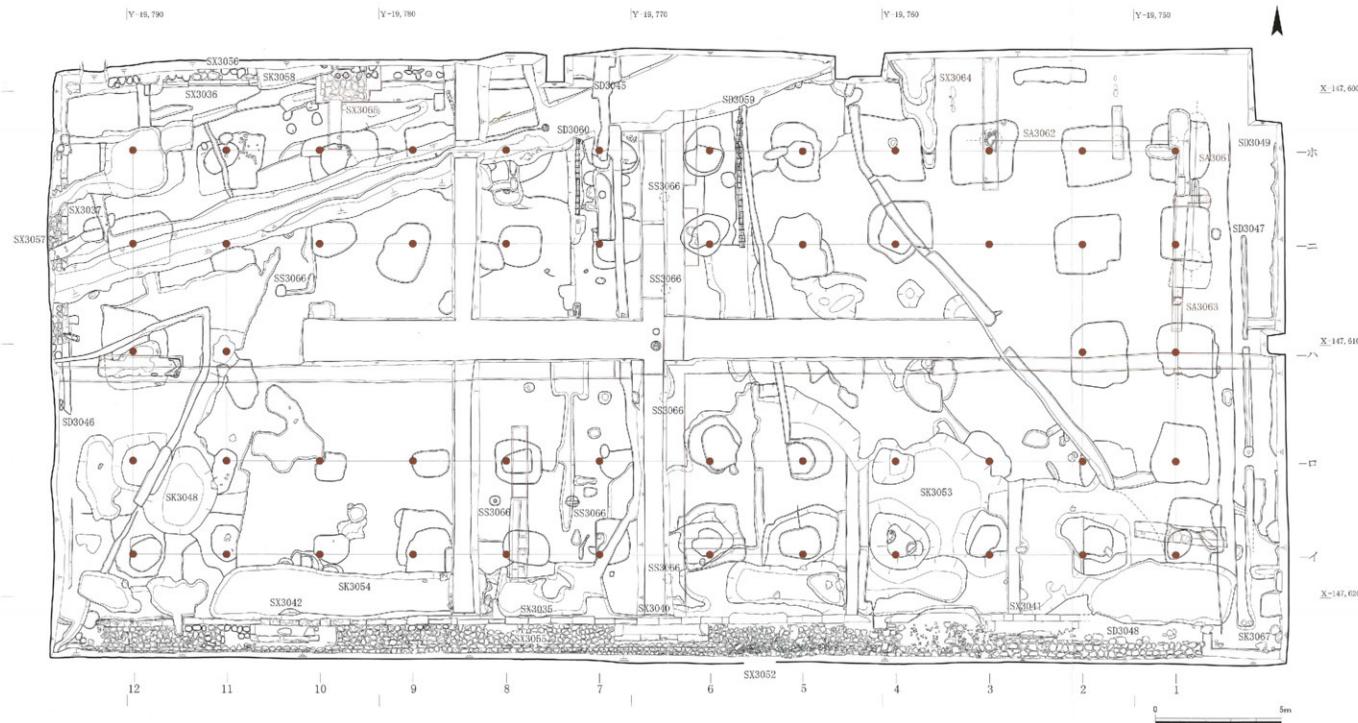
それ以前の食堂周辺の状況は、山田法瓶管主によると、食堂基壇内を南北に貫く寺内通路が走り、通路を境に東半は水田および耕作地、西半は耕作地や雑木林で、北東から南西に向かって流れる水路とそれに沿う里道が設けられていたという。今回の調査区内においてもこれらを確認した。

基本層序 調査区内は1979年以後の整備のため、15～30cmの厚さで盛土が施され、これを除去すると旧表土が露出する。旧表土は、調査区中央部と東西端部とで異なり、中央部は南北通路の路面である。一方、東西端部は既往の調査区と一部重複するが、旧表土が残存する部分は基本的に耕土、もしくは廃植土となる。旧表土の厚さは20～50cmである。

これらを除去したうえで食堂基壇上を検出した。厚さは10～80cm。今回の調査の主な遺構検出面はこの基壇上面である。一方、食堂造営前の遺構は、基壇上の下の整地上上面で確認した。整地上は、黄褐色粘質土や褐灰砂質土で、厚さは5～30cm、上面の標高は約59.80mである。この整地上は調査区内全体に広がっており、少量ながら瓦を含む。のことから、すでに周囲では瓦が埋入されるような堂塔の建設工事がおこなわれており、薬師寺の整備が進んでいたことが分かる。地山は黒褐色粘土層で、木片などの有機物を含む池沼状の堆積層である。地山上面の標高は調査区西端では59.70m、東端では59.40mである。調査区東部や南辺部では、これを切り込む自然流路を確認し、その中には埴輪片や古墳時代の土器片を含んでいる。



第4図 調査区全景（北から）



第5図 遺構平面図(1:150) ※柱位置は桁行中央間15尺、身舎梁行14.5尺、他はすべて12.5尺としたときの案

(2) 食堂に関わる遺構

食堂SB3050は桁行11間、梁行4間の東西棟礎石建物である。礎石の据え付け、あるいは抜き取りに伴う造構を主に基壇土上で検出し、基壇外装として地覆石や地覆石抜取溝、階段の地覆石等を検出した。また、基壇南・西・北辺では石敷、南辺では石敷の外側に石組雨落溝を検出した。

A. 基壇とその築成

食堂基壇を現地表面下30～80cmで検出した。南辺が大土坑SK3053・3054に、東辺および北辺も後世の耕作等により大きく削平されている。基壇は最も残りのよい中央部で、整地土上面から約80cm残存しており、標高は60.50cmである。基壇の平面規模は、基壇外装である地覆石や地覆石抜取溝の外側間で、東西が約47.1m、南北が21.6m。薬師寺の造営尺である1尺=29.6cm（『薬師寺報告』）を適用すると、東西159.1尺、南北73.0尺となる。

基壇築成は、整地土面に版築工法をもちいて基壇を築成する。整地および整地土上の版築数層は基壇周囲の石敷下までおよぶ。そのため、調査区南端、西端では掘込地業の有無は確認できない。しかし、後述するように北端では整地土面に設けられた食堂造営前の石列SX3064、石敷SX3065が版築の下で残存しており、少なくとも北側に関しては基壇築成にともなう掘込地業はないとしてよい。一方、東端は地覆石抜取溝SD3047を境に、版築が西と東に向けて傾斜しており、それぞれ、食堂と東僧房に関わる掘込地業と考えることも可能である。このように明確な掘込地業とはいえないまでも、版築縁辺部の一部は緩やかに掘り下げたのち、版築をおこなっている可能性がある。

版築は、1層が3～20cmの厚さをもち、残りのよいところで10層程度を確認した。基壇中心部では細かく、縁辺部にいくにつれ粗くなる。しかし、いくつかの層は広範囲でほぼ水平に施されているので、一定の単位で高さを揃えながら、水平に基壇を築成したと考えられる。ただしいずれの層も堅



第6図 食堂基壇西半の版築層（南東から）



第7図 西端段SX3042（南東から）

固なものではなく、やや軟弱な印象をうける。版築土には、黄褐色砂や、灰白色粘質土、淡黄砂質土などからなり、なかには凝灰岩を粉碎したものを混ぜ込んだ凝灰岩層と称すべき層もあった。また、基壇東部では、版築の中に瓦を面的に敷き込んでいるところがある一方、西部では炭層が広がるところも確認した。

B. 基壇外装と階段

基壇外装 基壇の南面、北面西部、西面中央部で地覆石SX3035～3037を検出した。地覆石は、後述する2石をのぞいてすべて二上山産溶結凝灰岩製である。また、基壇北面中央付近、西面南半、東面では、地覆石の抜取溝SD3045～3047を検出した。地覆石は、全体的に風化しているもののおよそ当初の面を残している。大きさは長辺65～125cm、短辺18～35cm、厚さ8～18cmとばらつきがあるが、上面および基壇外面を揃えて据えられている。羽目石を設置するための仕口等は設けられていない。地覆石上面の標高は、基壇南面の西側で60.15m、東側では59.97mと東に向かって傾斜している。

地覆石は基壇から外周部にかけて整地・版築をした上に、据付掘方を掘って据えられている。また、地覆石を据える際、下に瓦等を入れて高さを調整しているところもある。地覆石据付痕跡は基本的に1時期分しかなく、据付掘方の埋土が精良で炭化物等の異物が混じらないことから創建期のものと考えられる。また、再建にともなう大規模な改装の痕跡なども確認できなかった。ただし、基壇南辺で2石のみ春日山地獄谷産凝灰岩製の地覆石があり、これに関しては厚さ5cmと薄く、据え替えとみえられる。なお、羽目石や葛石など、地覆石より上部の基壇外装を原位置で残すものはなかったものの、基壇南面と北面で地覆石の前面に風蝕した凝灰岩片が散乱している箇所があった。凝灰岩は風蝕により原型をとどめていないため、断定はできないが、転倒した羽目石の可能性が考えられる。

階段 基壇南面で3ヶ所の階段、中央階段SX3040、東階段SX3041、西階段SX3042を確認した。食堂



第8図 基壇西面地覆石SX3037と石敷SX3057（北から）



第9図 基壇北面地覆石SX3036と石敷SX3056（南から）

の桁行の中央間および東西両端からそれぞれ2間目に相当する位置にある。SX3040は第62-14次調査でも検出されている。いずれも二上山産凝灰岩製で、基壇地覆石を引き通したうえで、コの字状に凝灰岩製地覆石を突出させている。幅は東西約3.7m(12.5尺)、基壇地覆石外面から階段地覆石外面までの突出は約75cmである。SX3041は地覆石の上で風化した凝灰岩が覆っており、踏石の一部が移動しつつ残存したものと考えられる。SX3042では、東側の耳石地覆石が抜き取られていたが、階段地覆石と引き通した基壇地覆石との間にも凝灰岩が据えられていた。なお基壇北面でも階段が想定されるが、後世の水路開削等を受けてその痕跡は確認できなかった。

『薬師寺報告』では、SX3040の出が75cmであることから、踏面25cmで、3段の階段と推定している。また、基壇の高さを、蹴上と踏面とが等しいとした場合、地覆石の見付高10cmを加えて約85cmに復元している。後述するが、礎石はまったく残存しておらず、基壇の正確な高さは不明である。しかし、基壇土の最上面の標高が60.50mであること、根石の標高が60.10～60.20mから推測すれば、基壇の高さは少なくとも階段の出と同じ75cmあったと考えても齟齬はない。

C. 基壇周辺

石敷 基壇南面、北面、西面で基壇地覆石の外側に沿って石敷SX3055～3057を検出した。南面石敷SX3055の遺存状態はよいが、北面石敷SX3056および西面石敷SX3057は後世の削平のため、ほとんどの石が抜き取られ、石敷が部分的に残るほかは石の抜取穴が確認できるのみである。SX3055は、15～30cmの花崗岩・チャート・片麻岩・安山岩などの石材を基壇地覆石と雨落溝の間に3・4列敷き並べる。地覆石外面から雨落溝北側石内側までの幅は東側で約95cm、西側では100cmで、わずかではあるが西方で広くなる。地覆石上面と地覆石外面に接する石敷との比高は3～10cm。また、SX3055は北端と南端で、4～8cmの高低差があり、雨落溝に向かって緩やかに傾斜する。SX3056、SX3057



第10図 北面基壇線（西から）



第11図 基壇南面雨落溝SD3048（東から）

は石敷の一部を検出したのみだが、石の大きさが30~40cmとSX3055よりも若干大きい。

雨落溝 基壇南面で石組雨落溝SD3048を検出した。SD3048は階段と地覆石の外側に沿って構築されている。石材には花崗岩、チャート、片麻岩、安山岩などがもちいられていた。後世に一部壊されているものの、遺存状態はよく、約40mにわたって確認した。15~45cmの石を底石として2・3列敷き並べ、その両端に20~40cmのやや扁平な石を立てて側石とする。側石上面と底石との比高は4~9cm。東端部で両端の側石を検出しており、溝幅は、側石の内々で約50cm。溝底上面の標高は西端で60.00m、東端で59.85mであり、基壇外装の地覆石と同様に、西から東に向かってわずかに傾斜する。また、東階段SX3041の正面では、SD3048内に30~50cm大の河原石が階段とほぼ同幅で置かれていた。おおむね上面が水平になるよう置かれていたが、いくつかは転倒していると思われるものもあった。これらは、階段前の雨落溝の溝幅を狭めるために意図的に置かれたものと考えられる。なお、雨落溝の埋土は灰色の粗砂であり、これが後述する石敷上面を覆っている。さらにその上にはごく薄くだが、焼土や炭をともなう赤褐色粗砂で覆わされていた。

また、基壇東面で雨落溝SD3049の西肩のみを検出した。SD3049は隣接する東僧房の西雨落溝と共有し、第62-3次調査でも検出している。SD3048と同じく石組と考えられるが、石自体は抜き取られていた。また第88-23次調査では、西面や北面の西端部分でも石組雨落溝を確認しているが、今回の調査では雨落溝直上に埋設管等が通るため、検出できなかった。

D. 磨石の据付け

壺地業 廟柱と東西両妻の身舎柱では、礎石を据え付けるに際し、壺地業をおこなっている。掘方は、辺2.0~2.8mの隅丸方形で、深さは0.4~0.5m。掘方には、粗砂と粘質土、また部分的に瓦片を入れながら層状に埋め固めている。壺地業の掘方の掘り込み面は確認できるところは限られるものの、基壇



第12図 調査区東部壺地業検出状況（南から）

版築の途中から掘り込み、礎石を据えた後、さらに基壇を積み足している。また、根石を据え付ける際に、掘り込んでいると思われるものもある。なお、壇地業のなかに含まれる瓦は大半が平瓦だが、なかには軒瓦もあり、すべて奈良時代前半の薬師寺創建瓦である。

礎石据付掘方 東西両妻の身舎柱を除く身舎柱位置では、原則的に壇地業はおこなっておらず、かわりに礎石据付掘方を検出した。礎石据付掘方の大きさは、1.7~2.4mの円形から隅丸方形である。礎石据付掘方は、基壇上面から掘り込んでいる可能性がある。根石がない礎石据付掘方の深さは、遺存する基壇上面から10~30cmと浅い。一方、根石をもつものでは40~50cmと深い傾向にある。掘方の埋土は基壇上由来の土とみられ、層状の埋土などの明確な地業の痕跡は認められない。

礎石抜取穴 磂石はすべて抜き取られ、調査区内には破片も残存していない。しかし、基壇が比較的良好に残っている中央部から西部にかけて、礎石抜取穴を検出した。大きさは1.0~2.5mで、深さは10~40cmである。一部は後述する基壇南辺の大土坑SK3054によって壊されている。

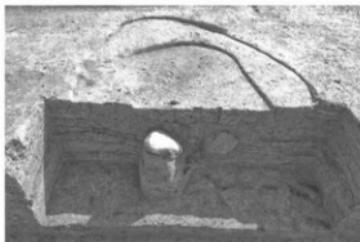
E. その他の遺構

足場SS3066 基壇上面で検出した、径約30cm、検出面からの深さ約40cmの柱穴である。これらは壇地業や礎石据付掘方の間に筋を擴てて並び、足場の遺構と考えられる。柱穴は食堂の遺構と重複しないため、いつの時期の足場かは断定できないが、埋土が淡黄色砂質土で基壇土由來の比較的精良な埋土であり、また瓦などの遺物を含まないことから、食堂創建時の足場と思われる。

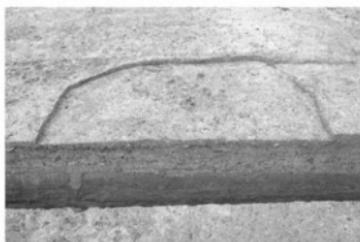
瓦瀧まりSX3052 南面中央階段SX3040と東階段SX3041の間で、雨落溝や石敷の上から、完形に近い軒瓦や丸・平瓦がまとまって出土した。これらは東西約8mにわたり折り重なって出土しており、屋根から落下した瓦の可能性が高い。軒丸瓦は薬師寺39型式、軒平瓦は薬師寺245・254型式でいずれも平安時代中期のものである。再建時の食堂の屋根に葺かれていた瓦と考えられる。



第13図 壇地業ホ6（西から）



第14図 磎石据付掘方ニ6（西から）



第15図 壇地業ハ1（南から）



第16図 瓦瀧まりSX3052（北から）

F. 建物の規模

食堂の規模は『薬師寺報告』では、桁行11間、梁行4間で、柱間寸法は、桁行は中央間を15尺、それ以外は12.5尺等間とし、総長を140尺、梁行は身舎2間を14.5尺、廊12.5尺として総長54尺に復元しており、「縁起」(長1丈、広5丈4尺5寸)とほぼ一致するとしていた。

今回の調査により建物の柱間数は、桁行11間、梁行4間と確定したが、礎石が1石も遺存せず、礎石抜取穴や壠石業の掘方の規模も大きいため、正確な建物規模の確定は困難である。ただし、基壇の規模、南面の階段、礎石抜取穴、雨落溝など今回検出した遺構からいくつか手がかりはある。

まず、基壇の規模は、地覆石や地覆石の抜取溝外側間から、東西47.1m(159.1尺)、南北21.6m(73.0尺)と確定した(1尺=0.296m:『薬師寺報告』)。ただし、南面中央階段から得られる南北中軸線から東は23.3m、西は23.8mと西の方が50cm程度広い。次に、基壇南面で検出した3ヶ所の階段の幅は、耳石地覆石外側間でいずれも3.7m(12.5尺)を測る。東階段の耳石地覆石東縁から西階段の耳石地覆石西縁までの距離は33.0m(111.6尺)で、中央階段は正しくこの中央に位置する。また、今回の調査では南面の石組雨落溝と東面の雨落溝抜取の西端を検出したが、北雨落溝と西雨落溝は既往の調査で確認している。南北雨落溝心心間の距離は、23.9m(80.7尺)、東西雨落溝心心間の距離は、東雨落溝の遺構が明確でないため、南北中軸線より西雨落溝心までの距離25.1mを折り返し、東西を50.2m(170尺)に復元する。以上が遺構から得られた食堂の規模に関する情報である。

この中で、特に注目できるのは階段である。先述したように、東西階段の耳石地覆石外縁間の距離は33.0m(111.6尺)である。南面階段は東西両妻からそれぞれ2間目にあり、この間に9間分の柱が配される。33.0mを9間で割ると1間は3.7mとなり、階段の幅(3.7m)にはほぼ一致する。したがって、検出遺構からは身舎桁行9間が3.7m(12.5尺)等間である可能性が指摘できる。廊の柱間寸法に関しては、遺構から明確な根拠はなく、ひとまず12.5尺とし検討してみよう。この場合、食堂の桁行全長は3.7m(12.5尺)等間で40.7m(137.5尺)となる。このとき、基壇の出は、南北中軸線から折り返した場合、東は3.0m(10尺)、西は3.5m(11.8尺)となり、西側柱から西雨落溝心までの距離(軒の出)は、4.8m(16.1尺)と算出される。この軒の出の数値を梁行方向にも適用すると、建物の梁行総長は14.3m(48.3尺)となり、身舎梁行2間が3.5m(11.8尺)と算出される。しかし、この身舎梁行の柱間寸法では、梁行方向の礎石抜取穴の位置とは合致せず、遺構と齟齬が生じてしまう。礎石抜取穴からみても、身舎梁行は最低3.8m(13尺)必要である。

一方、『薬師寺報告』の復元案をもとにすると、西面の軒の出は4.4m(14.9尺)、南北の軒の出は4.0m(13.3尺)となる。この場合、桁行、梁行方向で雨落溝までの距離は40cmほど異なるが、雨落溝の内々の幅50cmには収まる。したがって、梁行の柱間はひとまず学報に倣い身舎14.5尺、廊12.5尺と考えておきたい。

以上から、『薬師寺報告』の復元案のほうが、雨落溝の位置から考えられる案や『縁起』とも大きな矛盾はない(復元案A)。ただし、階段幅と桁行中央間の柱間寸法が合わず、このための東西の階段も柱間と合わないなど問題が生じる。桁行を階段に合わせ12.5尺等間とし、梁行の柱間寸法は仮に『薬師寺報告』に倣うとすれば(復元案B)、東西と南北とでは雨落溝から廊柱までの距離が異なってくる。この場合、雨落溝から廊柱までの距離が平置よりも長い妻側では、石敷に雨水が落ちると想定せざるを得ない。このようにいずれの柱配置も遺構とは完全に整合しない。今後、東西僧房や十字廊の取り合い等も含め再度検討する必要がある。

(3) 食堂造営前の造構

掘立柱列SX3061～3063 調査区東北部で食堂造営以前のほぼ正方位にのる柱列を3条検出した。これらは基壇版築の下層にある。東西掘立柱列SX3062は瓦を含む整地土上面から掘り込まれ、壺地業に壊されている。柱掘方は約0.6m、整地土上面からの深さは0.3mで、少なくとも3間以上あると思われる。柱間は2.1m（7尺）である。

SX3061はSX3062から0.6m東にある、南北掘立柱列である。整地土上面から掘り込まれ、壺地業に壊される。柱掘方は約1.2～1.4m、整地土上面からの深さは約0.2～0.4m。2間分確認し、柱間は2.4m（8尺）。SX3061のうち1基のみ、基壇土が削平され、整地土が露出する面で平面を確認した。

SX3063はSX3061の南0.5mに隣接する南北掘立柱列。柱掘方は約0.5m、整地土上面からの深さは0.3m。1間分検出し、柱間は2.4m（8尺）である。なお、これらの掘立柱列は、建物や塙になる可能性もあるが、部分的に確認できたのみで詳細は不明である。

石敷SX3065 調査区西北の北面基壇縁で確認した石敷。食堂北側柱西端より4つ目の柱位置の北方にあたる。東西16m、南北13mで、北辺は調査区外まで延びる。西と東、南の3辺に見切石を並べ、その中に約40cmの大きさの玉石を並べる。南辺の見切り石は東西のものに比べて大きい。石敷の南側は食堂基壇内部にまでおよび、基壇版築で覆われている。瓦を含む整地土を掘り込んで据えられているため、薬師寺に関する造構と考えられるが、その性格や食堂との関連は不明である。

石列SX3064 基壇東北隅から西へ12mの地点で確認した石列。南北方向に石が3石並ぶ。基壇縁より内側にあり、基壇版築土で覆われている。長さは約1m。石敷SX3065の東約24mの位置にあり、食堂基壇の中軸で折り返すとSX3065とは対応する。このためSX3065と同じ性格をもつ一連の造構の可能性もあるが、やや南に位置する。



第17図 石敷SX3065（北西から）

(4) 食堂廃絶後の遺構

大土坑SK3053 基壇南部を破壊する大土坑。大きさは東西約22m、南北約9mと東西に長い。南面の地覆石を一部破壊するが、地覆石を土坑の南辺として掘り込んだ様相が看取できる。深さは、残存基壇の上面から最も深い所で約50cmある。SK3053は、食堂SB3050の南側柱筋や入側柱筋の礎石位置にもおよび、側柱筋に施された窓地栄が鳥状に突出する。奈良時代から鎌倉時代にかけての膨大な量の瓦や、8世紀末から13世紀にかけての土師器や瓦器椀、土師皿などが出土地した。

大土坑SK3054 SK3053と同じく、基壇南辺を破壊する大土坑である。基壇南辺の地覆石を残し、土坑南辺の肩として利用していたらしい。東西約14.4m、南北約21mと東西に長い溝状を呈し、基壇上面からの深さ約0.8m。食堂SB3050の南側の側柱の礎石抜取穴を壊している。出土した瓦の量は、SK3053よりも若干少ないものの、SK3054の東辺部では、大量の凝灰岩片が捨て込まれていた。SK3053と同様の性格の遺構だろう。

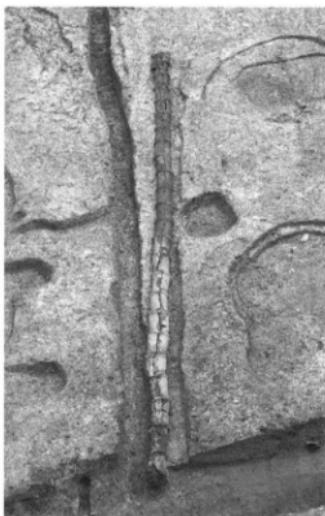
土坑SK3048 SK3054西端の約2m北で検出した。直径2.1~3.5mの不整形な円形で、深さは基壇の上面から1.0m。埋土に大量の瓦を含む。最下部で13世紀の完形の瓦器椀が1点出土した。

土坑SK3058 調査区西北隅から8m東で検出した。石敷SX3065の西端を破壊する。東西は3.1m、深さは1m以上。南端の一部分のみ検出し、大半は北側の調査区外に広がる。埋土は暗灰色粘土で、最下部に木材を敷く。東端には平瓦を立てて筒状にした樹が設けられていた。近世の水溜めであろう。

土管暗渠SK3059・3060 調査区中央の北寄りで南北方向の瓦製の土管暗渠を2条検出した。いずれも暗渠の両端が壊されているが、北に向けて緩やかに傾斜することから、南から北へ排水していたことがわかる。土管は片側にソケットをもち、近世のものとみられる。SK3059は、土管が24基残存しており、長さ5.5m分を検出した。一方、SK3060は13基残存しており、長さ3.0m分を検出した。



第18図 大土坑SK3053の瓦堆積状況（南から）



第20図 瓦暗渠SD3059（北から）



第19図 大土坑SK3053（南東から）

4 出土遺物

(1) 瓦傳類

本調査では膨大な量の瓦塊類が出土した。現在整理作業中であり正確な点数・重量は不明だが、概算で整理用コンテナ2000箱は下らないとみられる。ここでは現在までに整理が完了した代表的な軒瓦を報告する。軒瓦の型式番号については「薬師寺報告」に準拠したが、特に奈良時代のものについては『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』(奈良国立文化財研究所、1996)の型式番号も合わせて記した。

軒丸瓦 1は外縁が凸線彫蘭文、外区が珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺2(6276A)型式。本薬師寺および薬師寺の創建瓦で18(薬師寺201・6641G)や薬師寺202(6641H)型式と組み合う。提示したものは大土坑SK3053出土のものだが、ほかにも多くの細片が壇地業から出土した。2は外縁素文の複弁八弁蓮華文で薬師寺6型式。3は外縁に忍冬文を、外区に珠文をめぐらす複弁八弁蓮華文で薬師寺32型式。SK3053から出土した。以上の3点は奈良時代に位置づけられる。

4は外区が珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺39型式。瓦溜まりSX3052から多数出土し、丸瓦部まで完存するものも多い。出土状況から、後述する26や27と組み合うことが判明した。5は外区が珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺43型式。6も同じく外区珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺14型式。7は外区が珠文の單弁二十四弁蓮華文で薬師寺54型式。8は單弁蓮華文で弁数は17弁に復元できる。中房が八花形に突出しその周囲に蕊をめぐらすなど、薬師寺65や66型式に近似するが、弁は單弁で中房の蓮子が1+4である点や、外縁に珠文をもたない点が異なり、新型式である。9は外縁に幅射文、外区に珠文をめぐらす單弁六弁蓮華文で薬師寺76型式。瓦当径11cmほどの小型の瓦である。SK3053から出土した。10は外区珠文の單弁十六弁蓮華文で薬師寺84型式。11は外縁素文の單弁八弁蓮華文で、中房と弁区の間に一条の圈線をもち、圓弁は棒状で弁端は円頭である。外縁との間に一条の圈線がめぐり、圈線の内側を三角形状の文様がめぐる。中房には蓮子を配していたようだが、焼成前に乱雑に削り取られている。新型式である。以上の8点は平安時代に位置づけられる。

12は外区に珠文をめぐらす二巴左巻文で薬師寺110型式。范傷が生じており、珠文と圈線が接している箇所がある。SK3053から出土した。13は外縁素文の二巴左巻文で、巴頭部先端がわずかに接し、巴の尾部は一方のみ圈線にとりつく。SK3053から多く出土し、丸瓦部まで完存するものも多い。これまでに同文の軒丸瓦は知られていなかったが、薬師寺145型式に該当するとみられ、全体の文様が不明で外区素文の三巴左巻文とされていた型式である。SK3053における出土点数の多さや良好な遺存状態から、後述する32と組み合う可能性が高い。14は外区に珠文をめぐらす二巴左巻文で、珠文の内側に一重の圈線をめぐらす。巴頭部先端が尖り、巴の尾部は圈線にとりつかない。新型式である。15は外区に珠文をめぐらす三巴左巻文で薬師寺147型式。SK3053から出土した。以上の4点は鎌倉時代に位置づけられる。

16は外区に珠文をめぐらす三巴左巻文で薬師寺193型式。江戸時代に位置づけられる。

17は外縁忍冬文で外区珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺70型式。明治時代の補修瓦である。

軒平瓦 18は右偏行唐草文の薬師寺201(6641G)型式。本薬師寺および薬師寺の創建瓦である。提示したものは包含層出土だが、壇地業からも細片が多数出土している。19は外区圈線文の均整店草文で薬師寺214(6663H)型式。20は外区珠文の均整店草文で薬師寺218(6664O)型式。21は外区圈線文の均整店草文で薬師寺219(6665B)型式。SK3053から出土した。以上4点は奈良時代に位置づけられる。

22は上外区に珠文、下外区に線鋸齒文を配する均整唐草文で薬師寺237型式。SK3053から出土した。23は外区珠文の均整唐草文で薬師寺240型式である。SK3053から出土した。24は外区珠文の均整唐草文で薬師寺241型式。下弦幅22cmほどの小型瓦であり、SK3053から出土した。25は上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸齒文を配する均整唐草文で薬師寺244型式。全体的に範ざれが強く出ており、文様が二重になっている部分もある。26は上外区に珠文、下外区に線鋸齒文を配する均整唐草文で薬師寺245型式。27は外区素文の均整唐草文で薬師寺254型式。26と27は瓦溜まりSX3052から4と組み合って出土した。28は上外区に珠文を配する均整唐草文で、これまで良好な遺存例が知られていなかったが、薬師寺273型式に該当するとみられる。上弦幅21cmほどの小型瓦であり、SK3053から出土した。29は外区素文の宝相華唐草文で薬師寺281型式である。SK3053から出土した。以上8点は平安時代に位置づけられる。

30は外区素文で木葉文をもつ薬師寺291型式。31は外区素文で劍頭文をもつ薬師寺298型式。32は外区素文で左巻三巴文を均等に5個配する薬師寺303型式。頸部が平瓦部から剥離しているものも認められるため、瓦当部の接合技法は頸貼付け技法によるとみられる。SK3053から多く出土しており、平瓦部を完存するものも多い。出土状況ならびに完存品が多いという点から、13と組み合う可能性がある。33は薬師寺305型式で「薬師寺仁治壬寅」の年号銘(1242年)をもつ。土坑SK3048から出土した。34は外区素文の唐草文で薬師寺322型式である。SK3053から出土した。以上5点は鎌倉時代に位置づけられる。

35は外区素文で横唐草文をもち、江戸時代に位置づけられる。

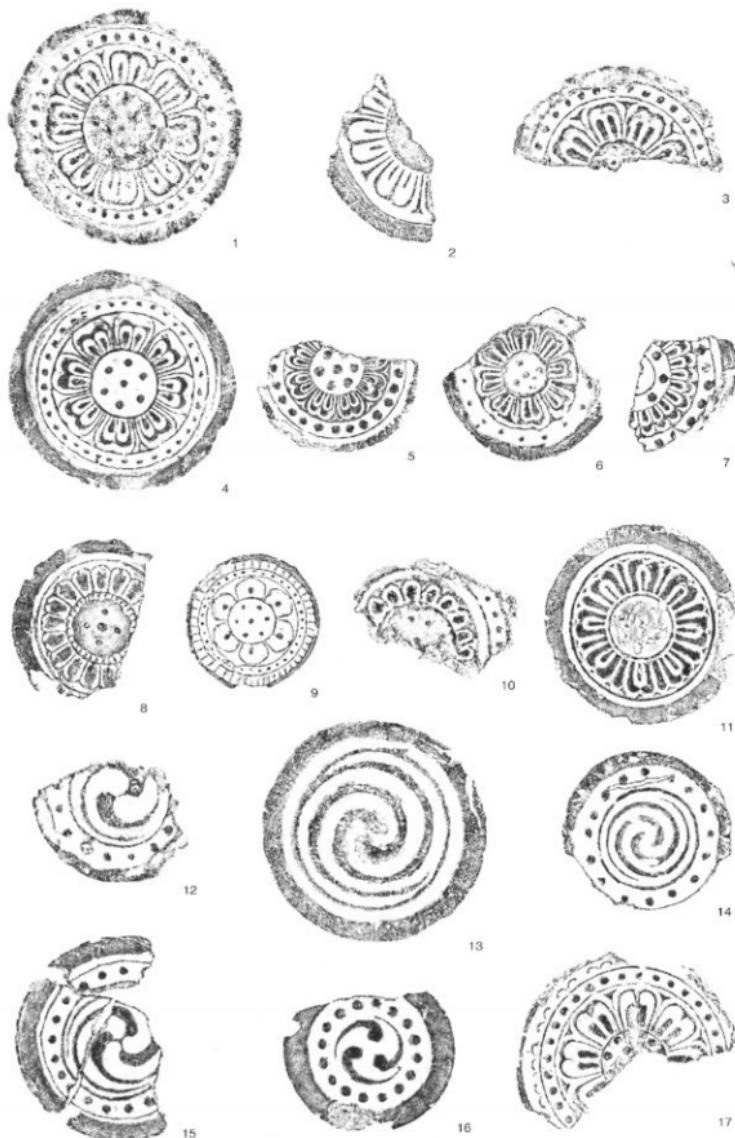
小 緒 今回の調査で出土した軒瓦は、現状で確認しうる限り室町時代の軒瓦の数がやや少ない印象を受けるが、本薬師寺の創建瓦から明治時代のものまであらゆる時代の瓦がみられる。また、出土地点ごとにいくつかの傾向を指摘できる。

現時点で判明している庭地業出土の軒瓦には本薬師寺および薬師寺創建瓦を多く含む。出土点数では薬師寺2(6276A)型式と薬師寺201(6611G)型式が多いが、薬師寺202(6611H)型式もみられる。

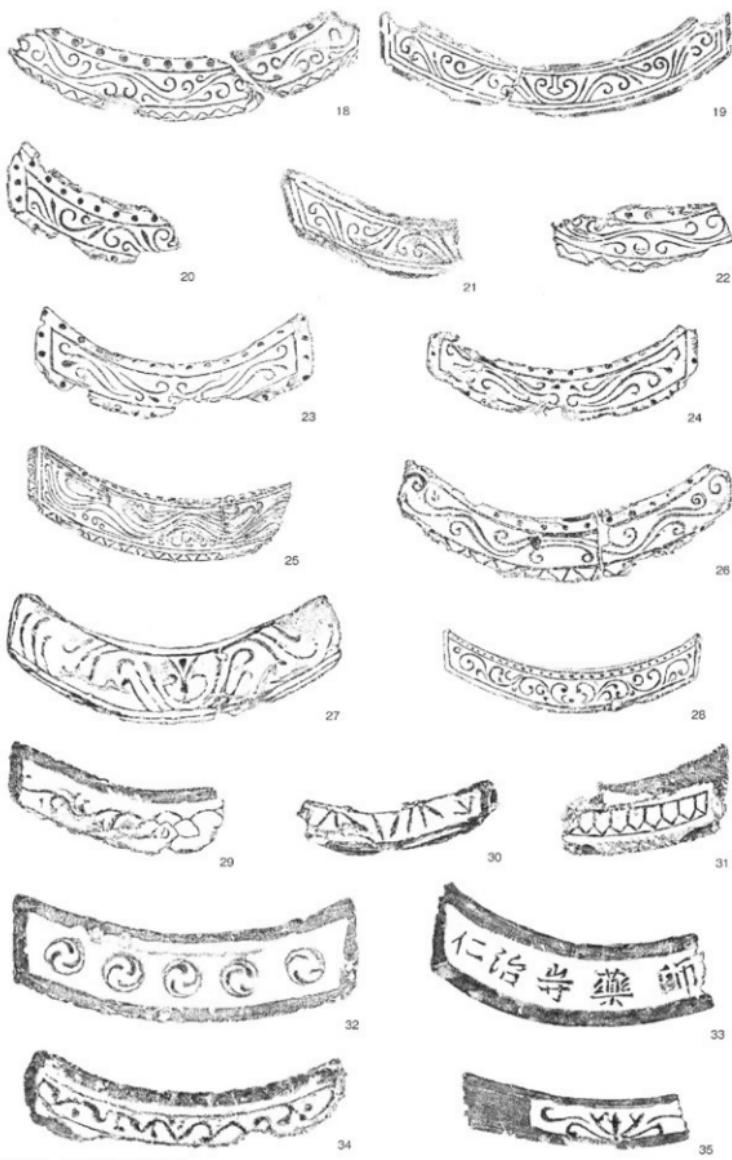
瓦溜まりSX3052は、遺構の様相から食堂の屋根から落した瓦の可能性が高い。ここからは軒丸瓦は4、軒平瓦は26と27が出土しており、再建時の食堂所用瓦の組み合わせとして注目できる。いずれも平安時代中期に位置づけられることから、寛弘2年(1005)の再建された食堂にもちいられたものと考えられる。軒丸瓦が1型式などに対して軒平瓦が2型式みられる点は興味深い。

大土坑SK3053からは本薬師寺および薬師寺創建瓦から鎌倉時代までの軒瓦が出土している。現状で把握している限りでは15や34など、鎌倉時代のものがもっとも新しく、土坑SK3048から出土した33の年号銘も参照できる。かなり幅広い時期の瓦が廃棄されたことがわかるが、その中でも13や32の出土が多く、またどちらも完形で出土しているものが多い点で共通する。両者は時期的に近接するとみられ、組み合う可能性がある。ただしSK3053からは、9や24や28のような裳階用とみられる小型瓦も出土しており、食堂以外の建物に葺かれていた瓦もまとめて廃棄されている可能性が高い。仮に13と32のセット関係を認めた場合にも、それらが食堂にもちいられていてかどうかは確定できない。

本調査で出土した瓦の大半は現在整理作業中であり、ここで提示した理解も暫定的なものため隨時更新される可能性がある。今後整理作業を進めた上で、正式な報告をおこないたい。



第21図 出土軒丸瓦 (1:4)



第22図 出土軒平瓦 (1 : 4)

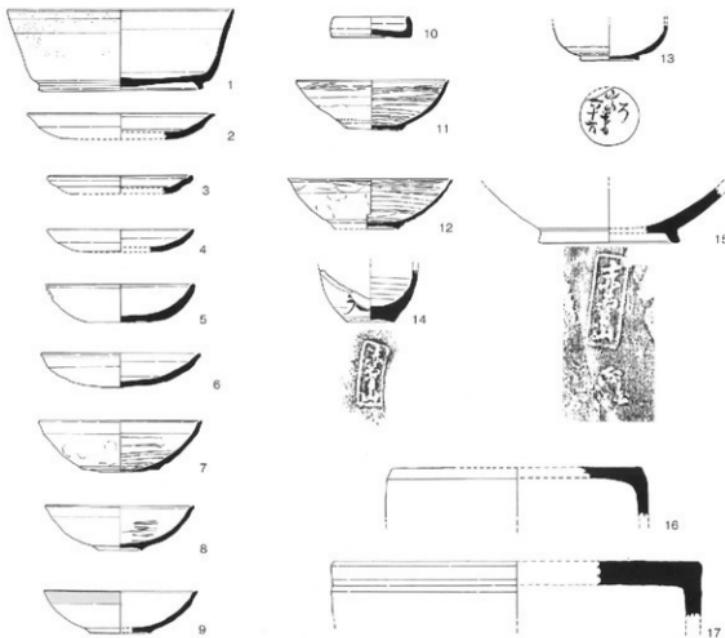
(2) 土器・土製品

調査区全域から出土した土器・土製品は整理箱7箱程度で、瓦の出土量に比べれば、きわめて少ないと言わざるをえない。奈良時代の須恵器・土師器、奈良三彩、平安時代の灰釉陶器、中世の土師器皿、瓦器碗、瓦質土器、赤膚焼を含む近世陶磁器、印判染付など近代以降の陶磁器などが出土した。古代のものは少量で、13世紀以降のものが中心である。

遺構からは、基壇南辺を大きく掘り込む大土坑SK3053から比較的まとまって土器が出土したもののが、整理箱1箱程度である。以下、食堂の変遷を考えるうえで重要な資料を中心に述べる(第22図)。

奈良時代の土器 1は基壇の壺地業から出土した須恵器杯Bである。ほぼ完形に復すことができる。青灰色の胎土で、陶邑窯産であろう。法量と高台の付き方からみて、奈良時代前半として矛盾はない。壺地業からは、このほかにも奈良時代の須恵器・土師器が出土しているが、いずれも小片かつ少量である。また、奈良三彩の小片も3点出土した。SK3053出土のものは三彩鉢の胴部で、内面にも透明釉が残る。包含層や表土から出土したものは、二彩の瓶または壺の胴部片で、内面の釉はいずれも残っていない。

既往の楽師寺の発掘調査では、30点近く奈良三彩が出土しているが、僧房や十字廊など食堂周辺からの出土が多い傾向が指摘できる。西大寺食堂院の調査でも奈良三彩が大量に出土しており(奈良文



第23図 出土土器実測図(1:4、14のみ1:2、拓本は等倍)

化財研究所2007「西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告書」、薬師寺における奈良三彩の出土傾向と合わせ、奈良三彩器物の保管に関して示唆的な成果をもたらしたといえる。

中世の土器 瓦溜まりSK3052から、瓦器片と土師器皿が出土した。2は土師器小皿。口縁部外面直下に強く一段ナデを施し、口縁端部は細い。底部は指おさえの痕跡が残る。胎土は淡褐色。3は「て」の字状口縁の土師器小皿。器壁は厚く、底部は丸く、口縁端部は丸く巻き込む。焼成は比較的堅緻である。瓦器は小片で、年代をはかりかねるが、土師器皿は11世紀末～12世紀頃の様相を呈し、食堂が廃絶する直前の時期のものであろう。

基壇南辺を大きく掘り込むSK3053から出土した土器は、奈良時代の須恵器Bや平安時代の土師器皿なども一定量含むものの、瓦器碗は川越編年の第Ⅲ段階のA型式～C型式(12世紀後半から13世紀)にかけてものが主体的である(川越俊一1983「大和地方の瓦器をめぐる二、三の問題」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所)。

4～6は土師器皿。口縁部直下を1段ナデする。7～9は瓦器碗。器壁が薄く、指オサエの痕跡が明瞭に残り、高台は矮小である。10は瓦器小皿。口縁部が直角に立つが、角は丸みを帯びる。土坑SK3048からは完形の瓦器碗(11・12)が出土した。口径は12.5～13.5cm。外面は口縁端部付近にのみミガキを施す。SK3053の下限に近い時期に比定できよう。

近世・近代の陶磁器 食堂の基壇を覆う包含層などからは、瓦質土器、染付、灯明皿の土師器皿などとともに、赤膚焼に関連する遺物が比較的まとまって出土した。赤膚焼は現在でも薬師寺の近隣に開窯しており、窯場から出た廃棄物が混入したのである。

13は赤膚焼の茶壺か茶碗であろう。高台に「万／□【山カ】のちる／六十六」と墨書きがある。14はきわめて小さい壺である。残存する胴部下方に「天」らしき字が残る。底部には「赤膚山」の印がある。15は大型の壺であろう。高台の内側に「赤膚山」の印の下に「正松」の印がある。同様の印を押す赤膚焼は薬師寺の西塔北側の立会調査でも出土している。その他、16・17は匣鉢。匣鉢は他にも4点出土しているが、16は口径21.6cm、17は口径30.6cmで、法量から2種類に分けられる。やや大粒の砂を含む胎土で、外面は粗い穢縫目を残すものもある。

(3) 金属製品・石製品・錢貨

金属製品 金銅製の垂木先金具が3点(うち2点は同一個体)、鉄角釘、鉄鍔などが出土した。鉄釘や鉄鍔などは、表土や基壇土上の盛土内からの出土で、遺構に直接関係するものはみられない。

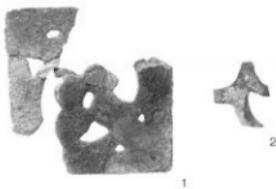
第23図1・2は金銅製垂木先金具である。

1は2点で構成されるもので、約14cm四方の方形に復元できる。透彫によって文様を彫るが線刻等はみられない。蛍光X線分析によって表面から金が検出されており、鍍金されていたと考えられる。

2は、約4cmの断片である。全体形は不明だが1の文様とは異なる。これらは全て、基壇東面の雨落溝SD3049を破壊する土坑SK3067より出土した。

石製品 花崗岩製の手水鉢と思われるものが1点、砥石が3点出土した。いずれも表土あるいは包含層より出土した。

錢貨 表土から寛永通宝が1点出土した。



第24図 垂木先金具(1:4)

第6章 結語

(1) 薬師寺食堂の建築

食堂の遺構 食堂は桁行11間、梁行4間で、建物の総長を含む柱間寸法は確定できないものの、『薬師寺報告』で検討している薬師寺の基準尺（1尺=0.296m）を用いれば、建物総長は桁行41.4m（140尺）、梁行16.0m（54尺）の復元案A、桁行40.7m（137.5尺）、梁行16.0m（54尺）の復元案Bが考えられた。復元案Aは『薬師寺報告』が推定する規模で、『縁起』の記載「長十四丈、広五丈四尺五寸」、すなわち桁行140尺、梁行54.5尺に近似する。柱間寸法は、いずれの場合でも、梁行は中央2間（身舎）が4.3m（14.5尺）、両脇間（廻）が3.7m（12.5尺）とみられるが、桁行は、中央間を復元案Aでは4.4m（15尺）、復元案Bでは3.7m（12.5尺）とする点が異なり、その他の桁行柱間は3.7m（12.5尺）となる。

基壇規模は地覆石あるいはその抜取溝の外側間で、東西47.1m（159.1尺）、南北21.6m（73.0尺）を測り、南面中央階段から得られる南北中軸線からの東西基壇縁までの距離は、西半が東半よりも50cm程度大きい。基壇地覆石の外側には幅95~100cmの石敷（地覆石外縁から雨落溝側石内縁まで）があり、さらにその外側に礎石の内法が50cmの石組雨落溝がめぐる。東西南北面の雨落溝は、今回の調査では検出できなかったが、既往の調査成果がある。ただし東面ではその位置が明確でない。以上から、側柱心から地覆石外縁までの基壇の出、および側柱心から雨落溝心までの軒の出は、南北面でそれぞれ2.8m（9.5尺）、4.0m（13.3尺）、西面では基壇の出が復元案Aでは3.1m（10.5尺）、復元案Bでは3.5m（11.8尺）、また西面の軒の出は復元案Aでは4.4m（14.9尺）、復元案Bでは4.8m（16.2尺）となる。これらから、軒の出は最小値が南北面の4.0m（13.3尺）、最大値が復元案Bの西面で4.8m（16.2尺）となる。最大値をとる復元案Bの16.2尺は、後述する三手先組物を用いても、柱間寸法に比してやや大きすぎる感がある。

類例との比較 古代寺院の食堂の類例としては、資財帳などの文献資料から知られるものと、発掘調査で明らかになった遺構とがある（第2表）。金堂や塔、講堂、門以外で、比較的規模の大きな建物や廂付きの建物を検出した場合、これを食堂に比定する発掘事例もある。ただし、甲賀寺（第1次近江国分寺）や百濟寺のように伽藍全体の位置関係から比定できる遺構のほか、たとえば比定建物の周囲から炭や焼土、土器が多数出土した伊勢国分寺のような遺構を除けば、規模や廂付属以外の積極的な根拠を欠く場合も少なくない。ただし、伊勢国分寺の場合も食堂院を構成する建物であることは間違いないと思われるが、食堂そのものである確証に欠く。

伽藍配置上の位置も、講堂の背後に置く場合（薬師寺・元興寺・百濟寺・西寺・四天王寺）と、伽藍中軸線からはずれて置く場合（東大寺・大安寺・興福寺・西大寺・西隆寺・甲賀寺）とがあり、後者は食堂院を形成する場合もある。また、法隆寺のように食堂が講堂を兼用すると考えられる場合もあって、伽藍における食堂の定点がないこともその比定を困難にしている要因であろう。石山寺では紫香楽にあった掘立柱による藤原豊成の邸宅を食堂として移築していることが正倉院文書に見え、食堂が掘立柱建物である可能性も否定できない。以上の要因のため、確實な食堂の類例はごく少ない。

なお、古代食堂の現存建築は、これも確實なものはない。現存する法隆寺食堂は、資財帳（第2表文献7）に現れる政屋と規模が近似することから、当初から食堂として用いられたものではない可能性が指摘されている。また、新薬師寺本堂も伽藍地の東方に位置し、身舎梁行を3間とすることなどから、当初は食堂だった可能性が指摘されているが、これも確定的でない。

さて、第2表の規模をみると、東大寺・元興寺が桁行11間で、柱間数としては薬師寺と同じであり、

第2表 古代寺院の食堂

寺院名	年代	規模 (間)	軒長(柱間寸法)	単位:尺	基壇の出 (尺)	基壇規模 (尺)	基壇外装	屋根形式	軒の出 (尺)	備考	文献
薬師寺	奈良市 8世紀前半	11×4	復元案A: 柱行140 (12.5×5+15+2×3+8)	95~118	139.5×73.0	切妻石	寄棟?	13.3~16.2	薬師寺本「尼庭寺経解」 に「米庭」とあり。	1	
東大寺	奈良市 8世紀後半	11×6	柱間寸法不明	不明	不明	不明	不明	不明	天罰使一枚行196尺、 雨落溝66尺に復元。	2~4	
大安寺	奈良市 8世紀前半	不明	柱行145、梁行86 柱間寸法不明	不明	不明	不明	不明	不明		5	
元興寺	奈良市 8世紀	11×4	不明	不明	不明	不明	不明	不明		6	
法隆寺	斑鳩町 8世紀前半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		7	
石山寺	大津市 8世紀後半	5×3	柱行102、梁行57 2面棟	不明	不明	不明	切妻+2面	6	獨立立體物。貴呂美の 藤原源麻板敷を移築。	8	
興福寺	奈良市 8世紀前半	9×3	柱行130 (11+14×7+1)、 梁行95 (11+12×3+1)	76~77	125.5×73.4	造作屋 (正貫)	寄棟? 再建 は入母屋	不明	鐵石焼付。	9~10	
西大寺	奈良市 8世紀後半	7×4	柱行116 (15+16×5+15)、 梁行60 (15×4)	不明	不明	不明	不明	不明	安政遺稿は一部復元。 食堂の外壁が不明。	10~11	
西徳寺	奈良市 8世紀後半	7×4	柱行70 (10×7)、 梁行40 (10×4)	不明	不明	不明	切妻	不明	獨立立體物 2面棟→屋 根。西大寺御飯堂の位 置から貴呂美と推定。	12	
甲賀寺	伊賀市 8世紀?	7?×4	軒行70 ?、 梁行36 (8~10×2+8)	不明	不明	不明	不明	不明	鐵石造。	13	
百濟寺	枚方市 8世紀?	5×3	軒行50 (10×5)、 梁行50 (8×5+2+9)	75 (計算)	65×41	瓦葺	切妻	不明	鐵石建築。鑄金背後に 14		
西寺	京都市 9世紀	7×4	軒行102 (12+15×2+16+15× 2+13)、梁行70 (13×13)	115 (正貫)	125×75	不明	入母屋or寄 棟	不明	11.5尺上	15	
四天王寺	大阪市 9世紀か	7×4	軒行66? (8~10×5+8?)、 梁行不確、軒の出不明	不明	不明	瓦葺	切妻	9	天燃焼火施物。	16	

*薬師寺をはじめ供養寺・西大寺は文書からも規模を知られるが発掘調査未実施に記す。
 このほか、食堂と並記される迷路物の発掘調査に、上木庵光明(伊勢勝成)、上武院寺(木子家)、寶林寺(渡賀兵左衛門)、
 宮内廣幸(那須江氏)、鳥居辰(柏原市)のほか、伊勢・淡路・播磨・讃岐・吉備の各個分寺等がある。

文献

- 1: 本著(今回の発掘調査)
- 2: 正倉院宝物図
- 3: 大安寺宝物図
- 4: 天保後(1910)「創建時刻に於ける東大寺南大門、東西兩塔院及び其沿辺。」
剪定記、御座、食堂」『日暮御跡』第283号
- 5: 大安寺御持鉢記(正倉院宝物記)
- 6: 「平安御色拾遺記」(平安道文)351号
- 7: 法隆寺御持鉢記(正倉院宝物記)
- 8: 海野 覚1937「奈良聖廟取直成板考」『實業』第30号
- 9: 泰文研究1959「興福寺 - 兼食堂の調査 - 」
- 10: 奈良正倉院宝物記(奈良正倉院文化財調査委員会編)
- 11: 安政御遺稿「奈大寺御持鉢記」(正倉院御持鉢記)
- 12: 佐藤義文1990「奈良御持鉢記の研究」『世界古文化』第42号
- 13: 肥後守男1921「奈良善通寺御持鉢記」『肥後守男集』第4号
- 14: 大阪市教委865「内宮百濟・加賀御持鉢記
- 15: 鳥居辰宮跡開削研究所1977「光明寺西跡」
- 16: 大谷女子大学教科会1986「四天王寺 - 食堂 - 」

大安寺の軒行145尺も薬師寺と近似する寸法と言えるだろう。ただし大安寺は梁行が86尺あり、東大寺・興福寺では身舎梁行を3間以上にとどめ、薬師寺の食堂はそれらに比して若干小さい。いずれにせよ、講堂に匹敵する規模をもつ寺内最大級の堂であることは、少なくとも文献から知られる奈良時代官寺の食堂の様相に合致すると見えるだろう。

発掘調査で基壇規模を含めた食堂の実態がよくわかっているのが、興福寺・百濟寺・西寺である。ここではとくに基壇の出に注目すると、興福寺・百濟寺が8尺程度であるのに対し、西寺では11.5尺ある。いずれも雨落溝を検出していないため、正確な軒の出は不明とせざるを得ないが、薬師寺では基壇の出が95~118.8尺であり、検出した雨落溝から軒の出は最小13.3尺、最大16.2尺と考えることができる。この最小の軒の出寸法をとったとしても、柱上に手先をもつ組物を備えていたと考えて誤りなく、金堂や塔、講堂のような形式の三手先組物だった可能性も否定できない。興福寺の発掘成果から、食堂は講堂に比べて簡略な建物だったと考えられているが(第2表文献9)、西寺の例も基壇外の雨落溝まで軒が出ていたとすれば三手先組物を備えるような寸法になると思われ、建築的に見てもこれまで考えられている以上に、格の高い建物を想定できるだろう。これはあるいは講堂のすぐ背後に位置する、という伽藍配置が関係しているかもしれない。

食堂造構の位置づけ 今回の発掘調査によって、柱間寸法の確定にはやや検討を必要とするものの、薬師寺食堂の建築的実態が判明した意義は大きい。少なくとも発掘調査で判明している食堂造構では最大であり、雨落溝を備えていることにより、建物の実態を把握できるもっとも情報量の多い、きわめて重要な食堂の造構であると言えるだろう。

(2) 食堂の造営と廃絶

今回の調査では、これまで文献からはうかがうことができなかっただ、食堂の造営や廃絶に関する知見を得ることができた。さらに造営の具体的な工法等も判明し、古代寺院建築の基礎工法を知るうえで貴重な成果を得た。

食堂の造営と造営以前の様相 基壇版築や壇地業から出土した土器や瓦の年代はいずれも8世紀前半のもので、食堂は遅くとも奈良時代前半には造営が開始されたと考えられる。また基壇版築より下層で、地山（池沼堆積層）を埋め立てて平坦にする整地が調査区全域に施されていることを確認した。この整地には瓦片が含まれ、薬師寺の伽藍造営や整備が進んでいたことがわかる。この整地を掘り込んで石敷SX3065や石列SX3064が設けられており、食堂造営以前の一時期はこの整地土面が地表面だったとみられる。また、同じ面から掘立柱穴列SX3061～3063が切り込む。これらは基壇版築より下層にあるため部分的に確認したのみで詳細は明らかでないが、建物や塀になる可能性がある。これからも薬師寺伽藍が整備されていく過程で、食堂造営前になんらかの施設が建てられていたことが明らかになった。これまで薬師寺造営に関わる遺構は伽藍中心部では明らかになっておらず、南都の大寺においてもほとんど知られていない。その意味でも貴重な成果をもたらしたといえよう。

基壇築成の工程 食堂の基壇築成の工程は主として断面の観察から、以下のように復元できる。①先述した整地の上に、版築で基壇を築成する（1次版築）。この際、基壇の東部では緩やかな掘込地業をおこなっている可能性がある。②廻柱および身舎の妻側の礎石位置のみ大型の掘方を掘り、内部を版築で埋め戻す壇地業をおこなう。③壇地業の版築の途中で根石を入れ、上に礎石を据え付け、さらに壇地業内の版築をおこなう。④基壇上面まで土を積む（2次版築）。⑤妻以外の身舎の礎石位置に礎石据付掘方を掘り、礎石を据え付ける。これらの工程は複雑だが、壇地業や基壇版築に含まれる瓦はすべて薬師寺創建期のもので、一連の工程である。同様の工法は、薬師寺中門でも確認されている一方、講堂や金堂などは壇地業をせず、基壇築成の工程も建物によって違いがある。その理由は不明だが、建物の格、工人集団の技術、時期差等が反映している可能性を想定することができる。

食堂再建について 磂石据付掘方や礎石抜取穴に重複はなく、地覆石も一部据え直されているものの、全面的な改修は認められなかった。石敷や雨落溝にも顕著な改修は認められず、層状に積まれた精良な土の上に構築されており、奈良時代建立当初の形態をほほとどめるところもある。また、火災にともなう明確な焼土層もない。しかし、食堂の屋根に葺かれた瓦が落下したとみられる瓦溜まりSX3052から出土した瓦が平安時代中期のものでまとまっていることからも、食堂が天孫4年（973）の火災後、再建されたことは確実である。したがって天孫の火災後には清掃がなされ、寛弘2年（1005）に再建された食堂は創建時の規模や礎石位置を踏襲して建てられたとみられる。

食堂廃絶について 基壇を壊す大土坑SK3053・3054・3048に含まれる土器は、古代から中世までと幅広いが、その下限は13世紀末でこれまでに食堂が廃絶していたことは確実である。また、先述したように瓦溜まりSX3052出土瓦は平安中期のもので、新瓦の組み合わせも判明し、一括性が高い。瓦は屋根に葺かれた後、長期間使用されると考えられるので、瓦の年代が直接廃絶年代を示すわけではないものの、SX3052のなかに後世の補修瓦を含まないことは注目できる。さらにSX3052下層からは11世紀末～12世紀頃の土器が出土した。この土器が食堂の屋根から瓦が落下する直前に廃棄されたと考えると、食堂の廃絶は12世紀代であった可能性が高い。

報告書抄録

ふりがな	やくしじ きゅうけいだいほぞんせいびけいかくにともなうはくつちょうきがいはういち							
書名	薬師寺							
副書名	旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報							
巻次	I							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	石田由紀子・箱崎和久・芝 康次郎・川畠 純・神野 忠							
編集機関	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所							
所在地	〒630-8577 奈良県奈良市二条町2丁目9-1 Tel 0742-30-6733							
発行者	法相宗大本山 薬師寺							
所在地	〒630-8563 奈良県奈良市西ノ京町457 Tel 0742-33-6001							
発行年月日	西暦 2013年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
史跡薬師寺 旧境内	奈良県奈良市 西ノ京町	29201	05C-0031 -A	34度 9分 4秒	135度 47分 3秒	2012.9.24 2013.3.22	1350	境内整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項			
史跡 薬師寺 旧境内	寺院	奈良時代 江戸時代	礎石建物 基壇 雨落溝 石敷 柱穴列 廐棄土坑 暗渠	瓦磚類 土器類 金属製品 凝灰岩 錢貨	食堂(瓦葺礎石建物) 基壇を検出し、基壇 および遺物規模を明 らかにした。また造 営・廃絶に関する年 代的手がかりを得た。			



2013年3月28日 印刷

2013年3月29日 発行

薬師寺

旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報 I

編 集 独立行政法人国立文化財機構

奈良文化財研究所

発 行 法相宗大本山 薬師寺

印 刷 能登印刷株式会社
